

在宅療養コーディネーター・ナース養成研修が盛況です!

編集室

在宅看護で求められる伴走型支援の考え方を学ぶことを目的に、聖路加国際大学にて在宅療養コーディネーター・ナース養成研修が2024年11月～2025年1月にかけて開催されました。本研修は従来、病院から地域への患者の移行支援を担当する看護師等を対象に開催されていた講座が、今回より厚生労働省が主導する「令和5年度看護職員確保対策特別事業地域を包括的に看護する訪問看護師等の人材育成プログラム作成事業」の一環として、リニューアルした内容です。本稿では、全5回のうち初回講座の様子をレポートします。

支える医療としての看護実践力を身につける

まず初めに、本研修で目指す目標が講師を務める山田雅子氏（聖路加国際大学看護リカレント教育部部長）から示されました。山田氏は「入院した高齢患者に対し、看護師は“自宅での暮らしはもう無理”と言いたくなりがちだが、そうした思い込みから抜け出すには課題解決型思考でなく、多様な人々の暮らしを支援するための“支える医療としての看護実践力”を理解し、展開する力を身につける必要がある。本研修を通してそうした力を身につけてほしい」と述べました。

続いて、研修講師を務める宇都宮宏子氏（在宅ケア移行支援研究所代表）より、看護師が行う伴走型支援の概要について解説されました。発表では、人生の最終段階を迎えるまでに入院を繰り返す高齢者の状態像の変化について言及され、生活を構築し直す必要のある分岐点において、患者や利用者を中心としたチームでの伴走支援が求められる、と説明されました。宇都宮氏による講義の後には「リハビリに対する意欲が持てない高齢男性」という事例が共有され、4～5名のグループに分かれて支援の在り方を検討し、全体で共有していきました。

支援チームの皆で考えることが重要

本研修の参加者は病院（病棟や外来、入退院支援



研修の様子。在宅看護現場で看護師に必要とされる併走型支援の在り方について、研修講師の山田雅子氏（左）や宇都宮宏子氏（右）が解説している。

室など）や訪問看護ステーションに所属している方で、全体共有の場では在宅看護現場でよく遭遇する状況への対応についても話されました。例えば、利用者が寝たきりのため生活援助はヘルパーが日常的に行っているものの、訪問回数や時間に制限があり、洗濯やゴミ出しまでは終えられていないという場面での考え方についてです。山田氏は、このようなケースでは訪問看護がヘルパーと連携することで解決可能とした上で、「看護師でなければできないことのみを行うのではなく、既存の仕事の枠をはみ出すことで、暮らしを支える力につながることもある」と述べ、「チームケアは役割分担するのではなく、役割を重ね合わせることが重要」と強調しました。

他にも、参加者からは「生きる希望を見失いつつある患者や利用者、家族への声のかけ方に悩んでいる」といった日々の悩みも共有されました。これに対し、小児専門医療機関のNICUに所属する参加者が、出生時の体重が1000mgほどでNICUに入った患児が、無事に発育・成長し、時を経て看護師として同機関に就職した事例を共有。こうした例を患者・家族に紹介することで、相手の不安を取り除いて励ませる場合があると説明しました。

*

一日がかりで在宅療養支援のエッセンスを学んだ参加者らは充実した時間を過ごせたようで、会場には満足感が広がっていました。本研修の内容は厚生労働省のHP (<https://www.mhlw.go.jp/content/001255583.pdf>) にも掲載されており、2025年度以降も開催予定ですので、興味のある方は参加してみたいかがでしょうか。